SHINKYO SUMMER CONCERT

'75　新響サマーコンサート　8月9日(土)午後6時半　東京文化会館大ホール

第1部　ワルツ王　ヨハン・シュトラウスII世の作品を集めて（生誕150年記念）　Johann Strauss（Son）

1.「こうもり」序曲
Overture to "Die Fledermaus"
2.「おしゃべり」ポルカ（トリッチ・トラッチ・ポルカ）　作品214
3. 円舞曲「ウィーンの森の物語」　作品325
"Geschichen aus dem Wienerwald" Walzer Op.325
4. ポルカ「狩」　作品373
"Auf der Jagd" Polka Op.373

第2部　ラテン・アメリカン・シンフォニエッタ……モートン・グールド
LATIN-AMERICAN SYMPHONETTE ……Morton Gould

1. ルンバ — Rhumba
2. タンゴ — Tango
3. グァラチャ — Guaracha
4. コンガ — Conga



新交響楽団は1956年に創立されたアマチュアオーケストラです。

創立以来の常任指揮者・音楽監督である芥川也寸志氏は、常々、「アマチュアにはプロに無い良さがある」と主張し、その信念を情熱の糧として19年間にわたり、ほとんど献身的に新響を指導してきました。毎週1回の練習に欠かさず棒を振るその持続する志は、それだけで尊敬に価するものわあります。

振り返ってみるに、1967年秋のソ連演奏旅行、1969年秋の沖縄九州芸術祭参加、1972年暮のFM東京出演、今年のストラビンスキー三部作の演奏会等、多くの実績を残し、技術的にみてもアマチュアとしてはレベルが高いとの評価も受けてきました。が、新響は毎回お客様に、プロに無い良さのある演奏を聴かせていますでしょうか。

名のあるもの、高い演奏技術を持つものが良い演奏をするとは限りません。演奏技術のあまり無いアマチュアオーケストラを聴いて感激したことがあると思います。

しかし、その事を持って例えば、常にアマチュアはプロより「純粋」であるという詰らない考え方を証明できるわけはなく、アマチュアはいつも、どこか良いところのある演奏をするという事にもなりません。演奏会を開く以上、アマチュアがアマチュアである事だけを誇りにするというわけにはいかないのだと思います。

「音楽は創造的な感性の発露である。従ってその営みは作り手、弾き手、聴き手の区別なく様々な形で存在する。現在ではプロの作曲家、プロの弾き手、プロの聴き手（音楽評論家）という様に分化してしまったが本来ならば、作り手→弾き手→聴き手→作り手という循環の中にこそ、真の音楽の営みが存在する」（芥川氏著書「音楽の基礎」より）という意味での「アマチュアにはプロにない魅力がある筈だ」という芥川氏の信念のもとに、音楽が好きでたまらない人が集まって作りあげたオーケストラとして、できる丈多くの人々に演奏を聴いて頂ける様にと、私達は考えています。(H.I.)

指揮　芥川也寸志　吹奏楽　瑞穂青少年吹奏楽図　ツィター独奏　河野保人

第3部　ブラス・バンドと共に　組曲「展覧会の絵」……モデスト・ムソルグスキー＝モーリス・ラヴェル編
TABLEAUX D'UNE EXPOSITION……Modest Mussorgsky＝Maurice Ravel

1. プロムナード——こびと　2. プロムナード——古い城
Promnade ——Gnomus　Promenade——Il' vecchio castello
3. プロムナード——チュイルリーの庭（遊んだあとのこどものけんか）
Promenede——Tu lleries：Dispute d'enfants après jeux
4. ブィドロ（ポーランドの牛車）　5. プロムナード——卵のからをつけたひなの踊り
Bydlo：chariot polonais　Promenade——Ballet de poussins dans leurs coques
6. サミュエル・ゴールデンベルクとシュミイレ（金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人）
Samuel Gololenberg et Schmuyle
7. プロムナード——リモージュの市場（言い争う女たち）
Promenade——"Limoges" le marché：Femmes disputantes
8. カタコンブ　（ローマ教の墓）　（死の世界の言葉で死者に語りかける）
Cataconbae：Sepulchrum romanum——Con mortuis in lingua mortua
9. バーバ・ヤーガの小屋（めんどりの足の上に立つ小屋）
La cacabane de la Baba Yaga（Cacabane sur des pattes de poute）
10. キエフの大きな門
La porte des Bohatyrs de Kiew

瑞穂青少年吹奏楽団は、牟田久寿氏の指揮の下、瑞穂中学校ブラスバンド部の卒業生及び在学生により昭和44年12月に結成された吹奏楽団であります。

メンバーは最年少の14才から、最年長の23才までと年令層が厚く高校生がその大半を占めている若さあふれる吹奏楽団です。

創設以来、様々な活動を行ってきました。「創設記念演奏会」「クラシックコンサート」「スプリングコンサート」「サマーコンサート」「クリスマスコンサート」等の単独演奏会をはじめ、吹奏楽連盟主催の合同演奏会、瑞穂町の行事・式典での演奏、施設への慰問、ステージ、パレードを問わず幅広い演奏活動を続けてきています。

演奏曲目も幅広く、クラシック、ポピュラー、ジャズ等からテレビのマンガ主題曲まで多種多彩を極めています。

このバンドの特徴の1つは、団員のすべてが牟田久寿氏の指導を楽器を手にした時から受けていることで、いわば牟田氏の門下生の集まりということができ、このことが楽団の運営に良い影響を与えているといえましょう。



もう1つの特徴は女子がメンバーの約¾を占めていることですが、管楽器を女性が吹くことは一般に困難なこととされていますが、この楽団では女子はそのハンディを乗り越える努力をして、立派に世間の常識をうち破る活躍をしていると申せましょう。

1972～74年，東京都吹奏楽コンクール一般の部金賞。
1973年；全日本吹奏楽コンクール一般の部銀賞。
1974年；全日本吹奏楽コンクール一般の部金賞。
指揮者；牟田久寿。

国立音楽大学クラリネット科卒、航空音楽隊に約10年在籍し1966年より瑞穂中学校教諭。
現在日本吹奏楽指揮者協会常任理事、全日本吹奏楽連盟東京支部常任理事。

—曲目解説—

ヨハン・シュトラウス集

一、「ワルツの父」と「ワルツの王」

周知のとおり、ヨハン・シュトラウスといえば「ワルツ王」として世界的にその名を知られています。しかしワルツの作曲家としてのヨハン・シュトラウスは二人いて、その二人とは父子の関係であり、我々が身近に接することのできるワルツの作者は息子の方です。今日演奏されるものもすべて息子の作品です。父シュトラウスは「ワルツの父」と称され、息子シュトラウスは「ワルツの王」ということなのです。つまり、北部オーストリアのレントラーという田舎舞曲を今日のワルツという形に仕上げたのは父シュトラウスであり、その基礎の上に、それをさらに洗練させてクラシック音楽の一分野に高めたのが息子ヨハン・シュトラウスだったのです。

二、ヨハン・シュトラウス

「ワルツ王」と称される息子のシュトラウスは１８２５年にウィーンで生まれ、１８９９年に亡くなるまで数々のワルツやポルカを作曲し、当時のヨーロッパの軽音楽界を席巻しました。

「ワルツ王」シュトラウスは「ワルツの父」シュトラウスの長男であり、その下にヨーゼフとエドゥワルドがいますが、彼らは二人ともやはりワルツの指揮者や作曲家になっています。音楽家の家系としてはバッハ一族が有名ですが、シュトラウス一家も音楽家として名を成しているのです。なお、「ワルツ王」はワルツを踊れなかったと伝えられています。

三、作品紹介

1.「こうもり」序曲

１８７４年にウィーンで初演された「こうもり」は１８７３年の暮にわずか6週間で書きあげられました。このオペレッタにはやはりウィンナ・ワルツがふんだんに使われています。このオペレッタの内容は、仮装舞踏会のこうもりの衣裳のまま道ばたで寝込んでしまったため、友人のいたずら気で「こうもり博士」というあだ名をつけられてしまったファルケ博士がその友人に陽気な仇討ちをするというものです。序曲はシャンペンの栓を抜く威勢のよい和音で始まり、感傷性ももたせた佳品です。

2.「トリッチ・トラッチポルカ」

シュトラウスが作曲した数あるポルカの中でも「トリッチ・トラッチポルカ」は比較的よく演奏されます。ポルカとは１８３０年頃ボヘミアに生まれた2拍子の民俗舞曲で、急速に全ヨーロッパに広まり、各地のサロンで踊られるようになりました。シュトラウスの作品もそうしたものの一つです。なお「トリッチ・トラッチ」とは「女房たちが、お楽しみのおしゃべりをすること」の意味です。

3.「ウィーンの森の物語」

この作品はシュトラウスの傑作の一つであり、代表的なウィンナ・ワルツです。作曲者が４３才の時にわずか一週間足らずで完成されました。「ウィーンの森」にさえずる小鳥達の声などウィーン近効の風景をハンガリーの民族楽器であるツィターを用いて表現しており、描写音楽としても、優れたものであるといえるでしょう。

4. ポルカ「狩」

この作品は馬にのって疾走しながらの狩をポルカに表わしたもので、鉄砲をうつ音も取り入れられたユーモラスな曲です。

「ラテンアメリカン・シンフォニエッタ」
モートン・グールド

一、グールドについて

モートン・グールドは１９１３年ニューヨークに生まれ、通俗楽派（シンフォニック・ジャズ）に属するアメリカの作曲家です。そしてアメリカにおいてはラジオ演奏向指揮者兼作曲家として非常に知られた存在です。

グールドの作品の特徴はアメリカの民謡とか歴史上の伝説、ポピュラー系統の音楽などを素材として作品の中にとり入れているということです。みなさんもお聞ききになれば感じられることと思いますが、グールドの作品は良きにつけ、悪しきにつけアメリカの臭いがプンプンにおってきます。そして、さらにグールドの作品を聞かれて、あるいはアメリカのミュージカル映画の中の音楽に似通ったものを感じる方もあるかも知れません。そのように、グールドはラジオ向けの作曲家の立場にあったということから、大衆性を持った作品を多く作っている作曲家であるということができると思います。

二、作品紹介

「ラテンアメリカン・シンフォニエッタ」は１９４０年に作曲されました。初演は１９４１年にフリッツ・マーラーの指揮でブルックリンで行なわれ、同年全米にラジオを通じて放送されました。グールドは、この作品においてラテンアメリカの舞踊音楽をとり入れていますが

新響維持会員募集中!!

新交響楽団は最高レベルをめざすアマチュアオーケストラとして昭和31年創立以来いづれにも属さない自主的な運営によって演奏活動を続けてまいりました。良い意味でのアマチュアらしい充実した演奏を通して多くの音楽愛好家の皆様との交流を深める為に維持会員制度を設けております。皆様の深い御理解と熱意あふれる御支援を切望するものです。

◆ 年額　お1人様　１８００円以上 ◆ 申込み以後１年間ご案内をさし上げる２回の演奏会へご招待致します。
◆ 定期演奏会のプログラムにご芳名を掲載します。 ◆ ご来場の方にはプログラムを進呈致します。
◆ その他新響の主催する全ての演奏会入場券が優先的に百円割引になります。
◆ お申込みは維持会員申込みと付記の上住所・氏名・年令・職業明記の上、下記迄。

〒160　新宿区須賀町14大湊ビル新交響楽団　TEL. 357-5255

それは印象主義的にというよりもむしろ新古典主義的な出来栄えのものとなっています。

第一楽章はルンバであり、それは二つの主題と短い展開部を持った簡単なソナタ形式がとられています。第二楽章はタンゴです。第三楽章はグァラチャです。グァラチャは舞踊音楽ものとドリンキングソングものとありますが、作者はこの楽章において双方の要素をとり入れています。第四章楽はアメリカン・キューバンダンスです。これは第一楽章のルンバ同様ブリリアントであり、コンガを多用しています。

「展覧会の絵」　　ムソルグスキー

一、作品の特徴

ムゾルグスキーはバラキレフやボロディンらと共にロシア国民楽派に属する一人です。だから彼の作品にはロシアの土臭い民謡がとり入れられ、聞く者にロシアの大地を思い起こさせずにはいません。しかし、ある楽派に属する人が、創作にあたっての基本姿勢・傾向とは別に、作曲家個人としての好みというものが当然その作品に影響してこないはずはないでしょう。ムソルグスキーは、シューマンの作品を非常に愛していました。そして、今夜演奏される「展覧会の絵」は、彼の作品の中でも最もシューマン的であるといわれています。

二、作曲の経緯

１８７４年にかかれた「展覧会の絵」は明らかに写実的（時には印象主義的）作品といえるでしょう。１８７０年前後はムソルグスキーの生涯のうち、もっとも充実した油ののりきった時代であり、ムソルグスキーの最大傑作であるオペラ「ボリス・ゴドゥノフ」が初演された１８７４年に「展覧会の絵」も完成されました。作曲者が３５才の時のことです。

この作品は作曲者の友人の、建築家であり水彩画家でもあったハルトマンをしのんで開かれた展覧会の絵を見て受けた印象に基づいてかかれています。しかし中には実際の展覧会では見られなかった画題もあり、必ずしも全部が全部忠実に絵の印象に基づいたものとは限らず、ムソルグスキーの空想の産物が含まれていることも考えられます。

三、作品の内容

曲は次の１０曲から成り、それは絵画による標題を持っていて、最初に奏される「プロムナード」によって１０曲の断片的な小曲の集まりを統一しています。

第一曲「こびと」第一の絵は「こびと」の絵です。がに股のこびと「地中海精」がグロテスクな姿で動めき廻って落ちつきがありません。このこびとは地底の宝を求めてしゅん動しているのです。第二曲「古城」これは多分イタリアの中世紀の城でしょう。イタリアの城塔の前では吟遊詩人が静かに歌っています。しっとりとした思索的な雰囲気をもった曲です。第三曲「遊んだあとの子供達のけんか」パリのルーブル宮殿の前の庭園は、日中は子供達がいつも遊びにくるところで、大人達は世間話をしながら子供達を見守っています。やがて子供達は喧嘩を始め、曲は最高潮に達し、母親達のとりなしで、やっと静かになり、再び平和な遊びが続くのです。第四曲「ビドロ」ビドロとはポーランド独特の、車輪が非常に大きい牛車のことです。大きな車をひいた牛が田舎道を遠くからのんびりやってきて、目の前を静かに通りすぎて行きます。第五曲「卵のカラを出切らないでいるヒナの踊り」ピヨピヨとひよこが鳴きながら、カラから逃れようともがいている様子をムソルグスキーは機智とユーモアに満ちた音楽で描き出しています。第六曲「サミュエル・ゴールデンベルクとシュミュイレ」金持ちで尊大にもったいぶったサミュエル・ゴールデンベルクとやせて神経質で貧しいシュミュイレという二人のユダヤ人との喧嘩を描いています。結局サミュエル・ゴールデンベルクが一喝して事は終わってしまうのです。第七曲「リモージュの市場」中部フランスの小都市リモージュの市場で二人の女が喧嘩をしている様子を表わしていますが、喧嘩が頂点に達して次の曲へ進みます。第八曲「カタコムブ」カタコムブとはローマ時代の地下の墓地のことで神秘的、回想的なオルガン風の響きで、墓地の静寂と不気味さ、宗教的で荘厳な感じを奏し出しています。第九曲「ババ・ヤガーの小屋」ババ・ヤガーというのは人間の骨を集めて煮つめ、これを道にまき散らし、その上をホウキにのってとびまわる魔法使いのおばあさんのことです。ムソルグスキーはその絵からホウキにのってとんでいくババ・ヤガーを想像してこの曲を作っています。第十曲「キエフの大門」キエフに建造されることになった市の大門の設計図によって霊感を得たものです。ムソルグスキーはこの門の荘大な印象を音によって描いています。

尚本日の演奏は、管弦楽＋吹奏楽のスタイルに編曲したものが使われます。さてどんな趣になりますか・・・

新響・団員募集!!

入団希望者に対しては原則として月の最終日曜日の午后オーディションを行い新響のレベル、パート人員の必要度、本人の環境、入団意志などを考慮して決定します。

〈オーディション課曲〉

Vn　モーツァルト　協奏曲No5,1楽章
Vla　エックレス　ソナタ2楽章
Vc　バッハ　無伴奏組曲第1番より「プレリュード」と「クーラント」
Cb　カブッツィ　協奏曲1楽章
El　モーツァルト　協奏曲二長第1楽章
Ob　ヘンデル　ソナタNo1,1楽章
Fg　モーツァルト　協奏曲1楽章
Hr　モーツァルト　協奏曲No3,2楽章
Tp　ハイドン　協奏曲1楽章
Tb　R.コルサコフ　協奏曲1,2楽章
Tub　ワーグナー　マイスタージンガー

〈問合せ先〉　①団員をご存知の方は団員を通して　②それ以外の方は都河(468-4703)まで

新交響吹奏楽団第17回定期演奏会

＊1975年　10月8日（水）　7：00p.m.
＊中央区立　中央会館　　＊会員券　500円
＊指　　揮　秋山紀夫
＊曲　　目　死と変容より――R.シュトラウス　歌劇「ザンパ」序曲――エロール　朝鮮民謡の主題による変奏曲――J.B.チャンス　ディエス・ナタリス――H.ハンソン　組曲「ソング・オブ・ウエールズ」――A.O.デービス　他
＊連 絡 先　横川仲史　杉並区天沼1－2－8　TEL 03－392－1908

新　響　第 30 回　定　期　演　奏　会

日　　時　10月19日（日）　午後7時
会　　場　日比谷公会堂
曲　　目　大学祝典序曲……ブラームスムス
ファゴット協奏曲……モーツァルト
交響曲第4番「ロマンティック」……ブルックナー
指　　揮　山岡重信（客演）　　独奏　前田信吉
入 場 料　S1000円　　A800円　　B500円

新　響　第　9　特　別　演　奏　会

日　　時　12月8日(月)、9日(火)　午後7時
会　　場　芝 郵便貯金ホール
曲　　目　交響曲第9番二短調〝合唱付〟……ベートーベン　　他
指　　揮　芥川也寸志
独　　唱　未　定
合　　唱　中央合唱団
入 場 料　S：1200円　　A：1000円　　B：800円　（全席指定）